

二〇二〇年舞台脚本コンクール（シナリオセンター主催）準グラン
プリ作品（旧作ですが）

めぐりあう時

——一幕

《登場人物》

山本真佐子（元小学校教員）

三浦早苗（小学校事務員）

男 1（山下） 女 1（斎藤）

男 2（松原） 女 2（河野）

男 3（渡辺） 女 3（岡本）

男 1、3、女 1、3 はいずれも真佐子の元生徒。

1

場面は一軒家の居間。テーブル、ソファがあり、周囲にいくつか椅子がある。豪華な雰囲気はないが、かといって貧相な家というわけでもない、趣味の良さを感じさせる室内。上手奥にキッチンがある設定。テーブルにはかなりの量の茶菓子や多数のコップが用意され、数名の客を待ち受けている様子。

部屋には二人の女性、真佐子と早苗がいる。早苗は四十歳を超えた地味な感じの女性で、無表情で抑揚の乏しいしゃべり方をする。真佐子は早苗よりもやや若く三十代後半。早苗と比べると華やかで知的な感じの女性だが、やや落ち着かない気配を漂わせている。

真佐子と早苗はテーブルを挟んだそれぞれ下手側と上手側の椅子

に腰掛けている。

真佐子 三時だったわね、確か。

早苗 ええ、そう聞いてるわ。三時に五、六人で来ますからって。

真佐子 (時計を見ながら) あと二十分か。……五、六人って誰なのかしら？

早苗 それは聞いてないわ。連絡役になってるのは山下っていう子だけ。

真佐子 山下君か、……ああ、思い出したわ。あの子になるでしょうね。そういう役は。昔からそうだったから。

早苗 昔から面倒見のいいタイプだったって？

真佐子 ええ、そういうタイプだったわ。勉強がすごくできるわけじゃないけど、いつの間にかクラスを中心になって何かしてるっていうね。

早苗 ああ、いるわね。そういう子、クラスに一人か二人。

真佐子 卒業したら同窓会の幹事とかやらされる子ね。

早苗 今度のもそういうことじゃないの？

真佐子 うちで同窓会をするって？ ちょっとそれはやめてもらいたいんだけど。

早苗 （真佐子がやや緊張気味なのを見て）別にそんな緊張しないでいいって。何も大層なことは起こりやしないわよ。

真佐子 （やや不安げに）そうかなあ。

早苗 そうよ。……まあ、昔の話は出るでしょうけど、それだけよ。食べたり飲んだりしながら楽しくおしゃべりして帰ってもらいましょう。お菓子も飲み物もいっぱい揃えたから大丈夫。

真佐子 ……でも、どうして今になって来るのかしら、私の所に。

早苗 （おもむろに立ち上がって、これ以降上手側を動きながら）さあ、どうかしらね。……八年経った今になってね。

真佐子 八年か。……長いようで短かったわ、月並みな言い方だけどね。……でも、それに何か意味があるのかしら。

早苗 私には分からないわ。あの子たちが 来たら、聞いてみて。

真佐子 あなたには、何も言っていないの？

早苗 ええ、聞いてないわ。私の電話番号を知ってたから、連絡してきただけ。私もただの連絡係よ。

真佐子 そう。それで、電話ではどう言ったの、山下君？

早苗 別に、事務的なしゃべり方だったわよ。今日の三時に、昔のクラスメートとうかがいますって。……もちろん、あなたによるしくお伝えくださいとは言ってたけど。

真佐子 そんなこと誰でも言うわよ。

早苗 そうよね。つまり至って没個性的な連絡事項っていうこと。

真佐子 何か色は付いてなかったの？

早苗 色？

真佐子 そう、つまり楽しそうだったとか、脅迫的だったとか。まあ、脅迫的っていうことはないだろうけど。

早苗 覚えてないけど、多分普通だったわ。それに、私はそれほど神経質じゃないから、何か付いていたとしても、分らないわよ。……そんなこと、もうすぐ分かるって。今からあれこれ考えなくても。

真佐子 私があなたと一緒に暮らしているっていうことは知ってたのね。山下君たち。

早苗 そうみたいね。なぜ知ってるのか、分からないけど。

早苗 そういう情報って、どこから漏れて、伝わるものなのよ。

真佐子 漏れて、伝わるって、何か悪いことでもしてるみたいじゃない。

早苗 そんな意味で言ったわけじゃないわよ。変な風に取りらないで。真佐子 そうね、ごめん。ちよっと落ち着かないから、そんな風に取ってしまったのよ。

早苗 まあ、人から人へ伝わって行って、あの子たちの耳に入ったんじゃない？

真佐子 （思わず椅子から立ち上がり）え？ 私があなたと一緒にいるっていうことは、秘密にしておいてって言ったはずよ。

早苗 なるべくそうしてたわよ。でも、何かの拍子にちよっと話してしまったかもしれない。もう八年も経つのよ。その間ずっと秘密にっていうわけにいかないわよ。

真佐子 あなたが誰かにしゃべったんでしょ？

早苗 覚えてないわよ。そんなこと。

真佐子 それくらいのこと、覚えててよ。

早苗 大丈夫。話してまずいことになる人にはしゃべってないから。
真佐子 そんなこと意味ないわ。あなたが今言ったみたいに、人から人へ、伝わっていくんだから。……きつと、もう学校みんなが知ってるんじゃないかね。

早苗 そうかもしれない。……でも悪いけど、あなたのことをもう知らない人も多いのよ。

真佐子 それはまた別のことだけど。……忘れられていく存在か。……まあ、もう私は学校に縁がないわけだし、意識過剰になっても仕方がないか。

早苗　そういうこと。冷たいようだけどね。……まあ、お茶でも飲みましょう。

早苗は上手奥のキッチンに行く。真佐子はあらためて椅子に腰掛ける。

早苗　（やや遠い声）悪いわね。あなたに聞かれてもちゃんと答えられなくて。色々知りたいでしょうに。

真佐子　仕方ないわ。あとしばらくすれば、知りたいことも分かるでしょう。

早苗　（同じ声）あなたは昔のことをよく覚えてるんでしょう？　あの出来事以外　でも。

真佐子　まあ、そうね、忘れたいことでも忘れられない方ね。

早苗　（同じ声）そういうタイプよね。普通先生になるのは。

真佐子　人のことは分らないけど、そうかもしれない。

早苗　（同じ声）私は、どっちかというと、覚えていないといけないことでも、忘れちゃうほうなのよ。

真佐子　生きて行くには、その方がいいんじゃない。

早苗は盆に茶を入れた湯飲みを載せて戻ってくる。

早苗（真佐子の前に紅茶を入れたカップを置きながら）そうかもしれないけど、そのわりには楽しい人生を送ったっていう記憶もないわね。

早苗は再度元のソファーに腰掛ける。

真佐子（紅茶を飲みながら）有難う。ちょっと、食べちゃおうか。たくさん用意したから。大丈夫よね。

早苗 どうぞ、つまんじゃええば？

真佐子 じゃあ、いただきわ。（そういつて、適当な菓子の封を開けて口に入れる）

早苗（やはり茶を飲みつつ）……でも、あのことは、忘れてないわよ。いくら私だって。

真佐子 そりゃ、そうでしょう。それがなかったら、私が今あなたと同じ家に住んでたりしないわけだし。

早苗 あなたにしたなら、片時も忘れられないでしょうね。

真佐子 忘れたくてもね。あの時の子供たちの顔は、今でも一人一

人覚えてるわ。

早苗 みんな大きくなったでしょうね。八年だから、ええと……。

真佐子 二十歳になるわ。小学校六年生の時の担任だったから。

早苗 そうか、二十歳か。区切りの年ね。……だから、あなたの所にやって来るっていうことになったんじゃない？

真佐子 そういうこともあるでしょうね。八年経って、大人になって、あの子たちのなかで、何かまとまったものがあつたのかもしれない。

早苗 まとまったものって？

真佐子 分からないわよ。こっちが聞きたいわ、そういうものがあるとしたら。

早苗 聞けばいいわ。何でも。向こうから会いに来たっていうんだから、何か言いたいことがあるんじゃないかし。

真佐子 おどかさようなこと言わないでよ。

早苗 おどかしてなんかいいわよ。だから、言いたいことっていても、あなたを悪く言うようなことじゃないって。……実際あなたは何も悪いことしてなかったんだから。法律的にも、あの子たちに対しても。

真佐子 もちろんよ。

早苗 だったら、どうしてそんなにこわがるの？

真佐子 こわがってなんかいらないわよ。でも、なぜだろう。……確かに、こわがる理由なんてないのね。……きつと、捨てたはずの過去が蘇ってくるような感じがするからね。

早苗 捨てていたの？

真佐子 そのつもりだった。捨てようとしていたのよ。……でも、捨てられていたのは、私の方だけだね。

早苗 あの子たちは、あなたを絶対に忘れてないわよ。

真佐子 忘れても良かったら、困るわよ。……でも、みんな大きくなっただろうから、会っても、誰が誰か分からないかもしれない。

早苗 そんなことないって。あなたは記憶力がいいし、きつと、みんな面影が残ってるわよ。

真佐子 そうね、きつと。

早苗 私でも、他の子と比べたら、あの子たちの顔は、覚えてる方よ。

真佐子 そりゃあ、覚えてるでしょ。ずっとあの学校にいたわけだから。

早苗 ええ、あの事件の後も、私はあの子たちを見ていた。卒業するまで。

真佐子 それで、どうだった？

早苗 別に、何か特別なことなんかありやあしないわよ。みんな卒業して、中学に進学した。ただ私に注意を払う子はいなかったけど。

真佐子 まあ、あなたは先生じゃないから。

早苗 そう、ただの事務職員。いつもいつも決まりきった仕事の繰り返し、だから私なんかでも務まったの。

真佐子 何もそんなこと言っていないわよ。

早苗 本当のことだから。……でも事務員 でも、子供たちの姿は見えるのよ。

真佐子 そりゃそうでしょう。毎日学校で会ってるんだから。……教師とは見え方は違ってもね。

早苗 そう、私たちは教室のなかの子供たちは知らない。遊んでる子供、おしゃべりをしてる子供、喧嘩したり、いじめられてる子供。……そんなところだけだけど、普段の顔が見えるからね。

真佐子 子供がいじめられてるところとかも、見るの？

早苗 ええ、ちよいちよいね、校舎の裏とか、校庭の隅とかで。……もちろん私たちには何もできないけど。

真佐子 ああの事件も、そういうところで起こったのよね。

早苗 ええ、そうだったわ。

真佐子 ……でも私はやっぱり思い出したくない。きっとあの子たちが来れば、語ってくれるでしょう。

早苗 そうね。私たちが思い出す必要はないのかも。……それに、私の記憶力じゃ、思い出そうとしても無理ね。

真佐子 あなたは覚えてないの？

早苗 ええ、残念ながらね。……でも私にだって、忘れられないことは、いくつもあるわ。

真佐子 たとえば？

早苗 ……死んだ夫のこととか。

やや間。微妙な空気が流れる。

真佐子 ……私も覚えてるわ、あなたのご主人のことは。

早苗 本当？ いつ会ったっけ。

真佐子 一度一緒に食事をしたことがあったじゃない。

早苗 ああ、そういうこともあったかもね。一度くらい。

真佐子 一度だけね。優しそうな人だったわ。

早苗 そうね。私には過ぎた人だったわ。

真佐子 そんなことないわ。……でも急だったわね。亡くなられたの……。

早苗 ええ、急性白血病だった。発病して、二ヶ月後にはあの世に行っちゃった。白血病なんて、映画かドラマにしか出てこないと思ってたけど、そんなことなかったわ。

真佐子 本当にお気の毒だった。まだこれからという方だったのに。

早苗 一緒に暮らしたのは結局三年だけ。……私の人生のなかでは一番楽しかった 三年間かもしれない。

真佐子 そうか。……思い出させて悪かったわね。

早苗 そんなことないわよ。私がちゃんと覚えている数少ない思い出だから。

真佐子 でも、あの方には感謝してるわ。あの事件の後、学校を辞めないといけなくなつて、勤めを見つけられたのは、確かご主人の方のつてだったでしょう？

早苗 ああ、それは主人の父親のおかげ。

真佐子 そうだったの？ ご主人の実家が資産家だったものね。

早苗 どういうわけかね。色々コネクションがあったのよ。

真佐子 ご主人が亡くなられて、もう……。

早苗 九年よ。

真佐子 そうだった、あの事件の起こる前の年だったわね。

早苗 そう、前の年だった。九年間か。……これも早いものね。

真佐子 ……でも、私もこの八年間死んでたわ。自分が存在しないものと思つて暮らしてきたわ。

早苗 ちゃんとあなたは存在してるって。

真佐子 どんな風に？

早苗 どんな風って、……そんなに難しく考えても仕方ないわよ。

人間毎日毎日が無事で過ごせたら、それで十分じゃない。もつとせっぱつまつて、明日のことも考えられないで生きてる人だって、珍しくないんだから。

真佐子 それが私だって言ったら、またそうじゃないって言われるわね。……でもあの子たちにとつてはどうだったのかしらね、この八年間は。

早苗 さあ、どうかしら。……忘れることはなかったんじゃない。あなたとはまた違った形で。

真佐子 そう、忘れてしまつては困るわ。あの子のためにも、それから、私のためにもね。

早苗 あの子って？ ……あの、死んだ……。

真佐子 そう、裕太よ、池上裕太。

早苗 忘れるわけじゃないわよ。私は学校にいたから分かるの。あの子たちのなかで、あの事件、っていうか出来事は消えていないなっていうことが。

真佐子 どんな風に？

早苗 どうって、はつきりとした形では言えないけど……。分かるわよ。だって、あれ以来、あの子たちは決してあそこに近づかなかったもの。

真佐子 あそこって。あの。

早苗 そう、あの浄化槽の近くには。

真佐子 よく観察してたのね。

早苗 そりゃあ、事務職員とはいっても、学校の一員ですからね。私だってあの事件はシヨックだったわよ。……まあ、あなたにそう言うのはおこがましいかもしれないけど。

真佐子 そうね、確かに私とは比べてもらいたくないわ。……私は逮捕されて、犯人扱いされたんですからね。何ヶ月も。

早苗 それはよく知ってるわ。だけど、学校の人間が皆傷ついたことも、本当なの。……まあ、今になっていくら言っても仕方がないけど。

真佐子 そんなこと、私が受けたものと比べれば。

早苗 比べものにならないわね。

真佐子 私はすべてを失ったのよ。職も、恋人も、未来も。……ただ、生きるために生きてきただけよ、あれからは。

真佐子は泣き始め、顔を伏せる。早苗はソファから立ち上がり、真佐子に寄り添う。

早苗 分かるわ、あなたの気持ち。……といっても、やっぱり人には分からないって言われるだろうけど。

真佐子 （顔を上げて）そんなことないわ。……あなたに恨みをもついわれはないわね。あなたには感謝してるわ、全面的に。

早苗 そんな感謝されるようなことはしてないわよ。

真佐子 ううん。だって、今こうして住むところがあるのも、あなたのお陰だから。学校を辞めないといけないことになって、路頭に迷うところを助けてもらったわけだから。

早苗 私だって、主人が死んで、この家に一人で住むのが淋しかったから、あなたに入ってもらって心強かったわ。

真佐子 でもあなたには、まだいくらでも再婚とかの道があったの

に。

早苗 そうかしら。……でもそういう気にならなかった。

真佐子 ご主人を愛していたから。

早苗 そうかもしれない。……それに、私にはもうあなたがいたから。

真佐子 （驚いて）じゃあ、まるで私があなたの再婚を邪魔してたみたいじゃない。

早苗 そんなことはないわよ。悪く取らないで。私は八年間あなたと暮らして、とても楽しかった。それだけよ、言いたいことは。

真佐子 まあ、そういうふう to 受け取っておくわ。

その時、玄関のチャイムが鳴る。

真佐子 来たみたいね。

早苗 そうみたいね。私が出るわ。

そう言って早苗は下手に退く。数名の来客がある気配が伝わってくる。真佐子は表情の緊張を強める様子。

早苗 （声） みんなよく来たわね。上がってちょうだい。

2

下手から「はい」「有難うございます」「お邪魔します」といった声が聞こえてくる。それにつづいて早苗と五人の若者たちが登場する。男三人と女二人である。

早苗 ご到着よ、昔のあなたの生徒さんたち。

真佐子 （固い言葉つきで）いらっしやい、よく来てくれたわね。

男1 （ややとまどいつつ）八年ぶりですね、山本先生。お元気そうですね。うで何よりです。

他の男女も「お久しぶりです」「ほんと、お元気そうで」など挨拶をする。

真佐子 どうも有難う。なんとか暮らしてるわ。みんなも、元気そうでよかった。それに、当たり前だけど、大きくなったわねえ。

……でもどの人にも昔の面影があるわ。

男1 僕が誰か、分かりますか？

真佐子 あなたは知ってる、山下君でしょ。あなたのことはもうこの人から聞いてるから。ここに連絡を取る役だったのね。

山下 ええ、そうです。ずっとこの方と住んでおられるんですね。

真佐子 そう、あの事件があった後からずっとね。……でも一緒に住んでるっていうのはおこがましいわ。この人の家に居候させてもらってるのよ、ずっと。（早苗を指して）ああ、三浦早苗さんよ。他の人たちにも紹介するけど。あなたたちの小学校の事務職員よ。あなたたちがいた頃からずっと務めてるわ。

元生徒たちは早苗に向かってそれぞれ「こんにちは」「初めまして」などと挨拶する。早苗もそれに適当な返事で応じる。

山下 （早苗に）今回は先生に引き合わせていただいて、ほんとに有難うございました。

早苗 いえ、別に大したことじゃないわ。まあ、あなたたちの役に立てればよかったわ。

山下 とても助かりました。おかげでこうして、山本先生と再会できたわけですから。

真佐子 それで、どうして私がこの人と一緒に住んでるってことを、

知ってたの？

山下 まあ、人づてについていうか、そういうことを後輩から聞いたものですか。

真佐子 後輩からか。……さっき、そのことをこの人と話してたのよ。私はこの人とここで暮らしてるってことを知られたくなかったから、隠してもらおうように言ってたんだけどね。……まあ、仕方ないわね、どっかから伝わっていくものだから。

早苗 私がどこかで話したのかもしれないけど、覚えてないのよ。悪いけど。

真佐子 まあいいわ、詮索しても仕方ないから。……でも、みんなが来てくれたのは嬉しいわ。普段この人と二人で淋しく暮らしてるから。

早苗 そうね、ほんとに。この家にこんな大勢の人が来てくれることなんか、めったにないから。

真佐子 めったにというか、あなたと暮らし始めてから、初めてね。……そうそう、他の人たちの顔もちゃんと見せてよ。

元生徒たちは多少はにかんでいる雰囲気。

真佐子 みんな顔は見覚えがあるんだけど、すぐに名前が出てこないかもしれないな。

山下 クラスで優等生だったのはこの二人ですよ。（隣の男2と女1を指し）誰かすぐわかるでしょう？

真佐子 えーと、松原君と、斎藤さん？

松原 そのとおりです。

斎藤 そうです、すごいですね。

真佐子 すごくないわよ。私のずっと先輩で、一年でも教えた生徒の名前を定年まで全部覚えてた人がいるのに、私なんか並みよ。それに山下君が言うように、あなたたち優等生だったじゃない。

松原 まあ、小学校のうちは、そうでしたけどね。上の学校に行ったら、ぜんぜん大したことなかったですよ。

真佐子 あら、そうなの？ でもいい大学に入ったんでしょ？何を勉強してるの？

松原 ああ、今はやらない文学部なんですよ。……専攻はまだ決まってませんが、社会学とか、心理学とかに興味があります。……でも就職はだめですね、きっと。

真佐子 大丈夫、そんなことないわよ。……山下君と、斎藤さんは？
山下 俺は某二流私大の経済学部です。

斎藤 私は女子大の英文科です。……なんか、ありふれてますけど。

真佐子 そう、みんなこれからなんだから、頑張ってください。

早苗 (女2) あなたは、ええーと、河野さん、だっけ。

河野 当たり。私みたいな目立たない子でも覚えてますか。

真佐子 もちろんよ。目立たないことなんかなかったわ。授業中よく発言してたじゃない。

河野 嬉しいです。そんな風に覚えてもらえると。

真佐子 あなたも大学生でしょう？

河野 いえ、私は専門学校です。インテリアデザインの勉強をします。

真佐子 へえー、素敵じゃない。私もインテリアが好きよ。この家を改築した時、私が壁紙なんか選んだの。

河野 (部屋を見回しながら) そうですか。とっても趣味がいいですよ。

真佐子 それは有難う。

早苗 この人はそういうことが大好きみたい。あなたと話が合うかもね。

男3 (自分から言う) 俺は未だに浪人やってます。

真佐子 ああ、それは大変ね。きっといい大学をねらってるんでし

よう。

男3 いえ、高望みはしてません。俺、一度高卒で就職したんですよ。でも、やっぱり大学に行きたくなって一年でやめたんです。

真佐子 そう、若いうちは何度でもやり直しがきくわよ、頑張つてね。杉本君。

男3 残念、渡辺です。杉本っていう奴もいたけど、ここには来ません。

真佐子 ああ、そうか。ごめんなさい。

渡辺 いえ、杉本は俺よりもハンサムだから、そいつと間違われるなら嬉しいですよ。

真佐子 (皆が立ったままであることに気づき) ああ、みんなその辺に座ってちょうだい。椅子が足りないから、床にも座ってちょうだい。……今日は皆が来るというので、お菓子や飲み物も色々用意したのよ。どれも大したものじゃないけど。みんな、気兼ねなくしてちょうだい。

山下 有難うございます。気をつかってもらって。

他の者も皆口々に「有難うございます」「気をつかってもらってすみません」などと言いながら、ソファ―や椅子、床などに腰をお

ろす。早苗は皆にジュースを注いだりする。

真佐子 みんなジュースは注いだ？ ビールの方がよかったっけ？
渡辺 俺はどっちかというと。……でも、ジュースでいいですよ、

今は

真佐子 そう、じゃ、後で持ってくるわ。とりあえずジュースで乾杯しましょうか。何に乾杯するのか、よく分からないけど。

山下 再会を祝して、じゃないですか。

真佐子 そうね、じゃあ、八年ぶりの再会を祝って、乾杯。

皆は口々に「乾杯」を言う。コップ同士があたる音があちこちでする。

山下 実は、あと一人来るはずなんですよ。でも三十分くらい遅れるって、さっき連絡があつたんです。

真佐子 そう、誰かしら？

山下 岡本っていう女の子だけど、覚えてますか？

真佐子 もちろん、覚えてるわよ。活発で、運動好きの女の子だったわね。

山下 ええ、そんな感じです。

真佐子 話してるうちに、皆のこと、だんだん思い出してきたわ。

……皆、変わってないわ。体が大きくなつて、顔も大人びたけど、
見てるうちに小学生の頃の顔と重なってくるもの。

斎藤 先生も変わってないですよ。あの頃と。

河野 ほんと、あの頃先生は若くて綺麗だったけど、今も同じです
ね。

真佐子 お世辞を言うのも習ってきたみたいね。

河野 お世辞じゃなくて、本当ですよ。全然変わってない。

真佐子 そう？ ……見かけはそうかもしれないわね。しわが増え
て、ちよつと太ったけど。

早苗 そんなことないわよ。昔と変わらないわよ。

真佐子 有難う。……でも、変わらないのも、よしあしよね。

早苗 どうして？

真佐子 だって、私はこの八年間、世間の片隅でひっそり暮らして
きたわ。目立たないように、人に咎められないように。……だから、私の生活は何も変わりようがなかった。変えるにも変えられ
なかったのよ。

早苗 そういう意味か。

生徒たちはやや罰の悪そうな表情になる。

真佐子 （元生徒たちに） あ、ごめんなさい。せっかく来てもらったのに、愚痴みたいなのを言つて。気にしないで。

松原 別に気にしませんよ。

山下 気にはしないけど、今日俺たちがここに来たのは、そのことと関わりがあるんです。

真佐子 そう、やっぱりね。……もちろん私も、そうだと思つてたけど。

早苗 まあ、ゆっくり話してちょうだい。私はビールでも持つてくるわ。

渡辺 あ、すみません。気を遣つていただいて。

早苗はキッチンに退場する。

斎藤 実は先日、小学校の同窓会があつたんです。それでみんな集まつたんですよ。

真佐子 あなたたち六年生のクラスだったしね。

山下 ええ、やっぱりそれが大きいです。

河野 今年みんな二十歳になるし、区切りの年ということ。

松原 結構集まりました。八割くらいの人が出席してくれました。

真佐子 そうね、私たちもさっきそんなことを話してた。皆二十歳になるわけね。確かに節目の年ではあるわね。

河野 それで、二次会の時に、あの話が出たんです。

山下 今日ここに来てるのが、大体その時のメンバーです。

真佐子 大事な時間を、その話に費やしたの？

松原 いえ、あの事件の話をするのは、大事なことですよ。

真佐子 良い思い出じゃないのに。

松原 ええ、そうです。確かに。……でも、みんなの心にわだかまりっていうか、ひっかかるものがあつたんですよ。それで何となく話を始めたんです。

渡辺 俺は嫌でしたよ。……思い出したくないじゃないですか、あんな事件。……でもやっぱり忘れることができないし。思い出すと、色々なことが芽づるみたいに出てきて。

真佐子 たとえば？

渡辺 色々ですよ。……もちろんクラスの友達が一人消えていなくなつたわけだから、ショックだったし。……それに、先生がいな

くなつたこともショックでした。

河野 本当に。……今も覚えてるけど、先生が学校を辞められることになって、淋しかった。

山下 あの事件の後、教室にぽっかり穴が空いたみたいな感じでした。

河野 それに次に担任になってくれた先生が、あまり良くなかったから。

真佐子 誰だったの？ 私の後に担任になったのは？

斎藤 倉田先生です。年輩の男の先生で、怖かった。

渡辺 俺もよく怒られました。

真佐子 倉田先生だったの。私も時々怒られたわ。

松原 先生が？

真佐子 そう、教育態度が生ぬるいとか。生徒に迎合的だとか。

斎藤 時代錯誤ですね。

真佐子 あの学校にはそういう先生が少なくなかったのよ、とくに年輩の人は。

早苗がキッチンからビールを数本とつまみを盆に載せて戻ってくる。

早苗 どうぞ、ビールがいい人は、飲んでちょうだい。まだ二十歳
になってない人もいるだろうけど、飲めるんでしょう？

渡辺 すみません。俺がリクエストしたわけだから、いただきます。

渡辺 はビールをグラスに注ぐ。他の者はそのままにしている。

早苗 倉田先生はあの時、五年生のクラス担任だったけど、とくに
あなたたちのクラスに変わってくださったの。

斎藤 へえ、どうしてだろう。

早苗 そりゃあ、あの事件で子供たちが動揺してるだろうから、ベ
テランの先生に任せられた方がいいって判断したんでしょう。

斎藤 そういう配慮だったのか。

早苗 それが良いことだったかどうかはともかくね。学校も色々考
えたんでしょう。

渡辺 確かにしばらく、みんなぼんやりしたまま毎日を送ってまし
た。

山下 お前はその前から、ぼんやりしてたけどな。
渡辺 うるさい。

松原 何かわけの分からない、嵐みたいなものに襲われて、それが通り過ぎていったような感じだったです。……それも、後から考えればのことだけだ。

真佐子 私が辞めた後、学校でどんなことがあったか、何も知らないの。知りたくなかったし、世間となるべく関わらないようにしてきたから。……この人と暮らしていながら、学校のことを話題にすることはめったになかったの。……だって、倉田先生のこと、今まで知らなかったくらいだから。

早苗 そのことは言ったわよ、いくら私でも。あなたが覚えてないだけ。……きつと、まだ嵐がつづいていたから、さすがのあなたもそんな情報は耳を通り抜けていったのね。

真佐子 そうだったの。確かに、あの頃私の後が誰に変わったかなんて、どうでもよかったわね。

河野 (早苗に) 事務の方だったら、あの事件のことはよく知っておられるんでしょうね。

早苗 まあ、知ってるっていうか、あの場にいたっただけだね。大変な騒動だったことは覚えてるわよ。でも八年も経つと、細かいところでは何が起こったのか、あまり覚えてないわ。あなたたちみたいに、思い出そうって気もないし。

松原 僕たちは本当に子供でしたからね。あの時何が起こったのか、多少詳しく知りたいっていう思いがだんだん強くなってきたんですよ。

真佐子 それが大人になるっていうことじゃないの？ ……そうだ、成人の祝いに、もう一度乾杯しましょうか。

山下 そうですね。そうしましょうか。じゃあ、今度はビールで。

男三人はビールをあらためてコップに注ぐ。女二人はジュースを注ぎ直す。

真佐子 じゃあ、二十歳の祝いっていうことで、乾杯。

一同 乾杯。（皆それぞれ手にした飲み物を飲む）

松原 実は僕は、まだなんだけど。

斎藤 私も、来月誕生日です。

真佐子 これから二十歳か、うらやましいな。何でもできるものね。斎藤 そんなことないです。世の中厳しくなってきたから、将来のこと考えると暗くなることもあります。

松原 ほんと、リストラとか、年金のこととかね。

真佐子 そんな世間じみたこと言わないの。

松原　そうですね、せっかく集まって、リストラとか年金の話はないですね。もつと話さないといけないことがあるわけだから。

河野　せっかく再会できたわけだから、先生と。

斎藤　先生があれからどうされてるだろうって、皆気になってたんです。事件があつてしばらくは、先生のことが新聞なんかには時々出てましたが、そのうち出なくなつて。

真佐子　出なくなつて、ほつとしたわよ。

山下　そうですね。……でも、先生の嫌疑が晴れたことを知つた時は、本当に嬉しかったです。……もつとも、それは親に教えられたんですが。

渡辺　俺はあの頃はまだ新聞なんかテレビ欄しか見なかったから、何が起つたのか、よく分からなかった。

河野　私もそう。（斎藤に）マサミはやっぱり偉いわね。小学生なのにちゃんと新聞を見てたんだから。

斎藤　そんなことないよ。ああいう事件があつたから、しばらく眼を通してただけ。（松原に）この人は違うでしょうけど。

松原　僕も大して変わりないよ。ただマスコミで先生の名前が出るのは嫌だった思いはあります。もちろん先生ご自身の方が何百倍も嫌だったでしょうが。

真佐子 そりゃ、そうよ。殺人犯扱いされたわけだから。

早苗 私もこの人の名前を見るのがつらかった。……だんだん時間が経って、世間がこの人のことを忘れてくれるようになって、ほっとしたわ。

真佐子 でもみんなは忘れてなかったようね。……それは嬉しいんだけど、それで、どうしてみんなここに来ようって思ったの？別に二十歳の祝いを、生徒殺しの疑いで学校を辞めた教師のところで迎えようっていうわけじゃないでしょうに。

山下 そうですね。……うまく言えないけど、同窓会で皆で話しながら、やっぱりあの事件っていうか、出来事に、けりをつけないといけないかなあって、思うようになったんです。

真佐子 けりをつける？ 何のけりをつけるの？

渡辺 何ていうか、俺たちは何もしなかったようだけど、やっぱり何かしたんじゃないかって。……うまく言えないんだけど。

斎藤 その感じは私にもあるわ。……すぐ大きな出来事だったですよね。あの頃私たちは小学六年だったから、何が起こったのか、よく分からなかったけど。

河野 池上君が死んだのは私たちの責任じゃないけど、やっぱり私たちもあの事件に関与していたんじゃないかって、思うようにな

ったんです。

真佐子 ……思うようになったのは、あなたが、それとも、みんなが？

山下 みんなですよ、たぶん。斎藤の言うことは分かります。……だって、あの事件で、先生がいなくなつたわけだから。

真佐子 （驚いて）ええ、じゃあ、私が学校を辞めたのが、あなたたちのせいだって言うの？ ……とんでもない、私は自分の判断でそうしただけ。あなたたちが負い目なんてもつのはおかしいわよ。

松原 負い目をもってるわけじゃないです。……でも、結局僕たちが先生を学校から追いやつたんじゃないか、つて思うところがあるんです。

山下 自分の判断で学校を辞めたつて、今言われたけど、でも、あの事件がなければ、先生はずつとあの学校に勤めてたでしょう？

真佐子 そりゃあ、そうでしょう。

山下 でも、学校にはいらなくなつて、辞めたわけですよ。

真佐子 あんな事件を起こして、犯人扱いされて、警察に取り調べられたのよ、何ヶ月も。そのことが新聞や雑誌に載つたりもしたわ。そんな人間が学校にいつづけることができると思う？ 私、

日本の社会も、そんなドライじゃないわよ。

斎藤 そうですよ。……すると、先生は、警察に学校を辞めさせられたって、思ってたっしやるってことですよ。

真佐子 まあ、因果関係を言えば、そういうことになるわね。……とにかく、私は無実だったわけだから。

斎藤 それはもちろんですよ。それを疑ってる人は誰もいないですよ。

早苗 そうね、学校のなかで、そう思ってた人は、いないと思うわ。私の知る限り。

松原 ただ、僕たちが思うようになったのは、……結局先生をそんな風に扱わせるようにしたのが、僕たちじゃなかったかっていうことなんです。

真佐子 そんな風って？ 怪しい人間のようにっていうこと？

松原 そうです。もちろん僕たちが先生をそういう風に思ったというんじゃなくて、警察の人たちに先生をそういう風に扱わせた根本に、僕たちがいるんじゃないかっていうことです。

真佐子 そんなことないわよ。そんな風に思う必要はないわ。

河野 でも、年が経つにつれて、だんだんそう思うようになったんです。……もちろんあのクラスにいたみんながそう思ってるわけ

じゃないでしょうけど。

斎藤 でも、そう思ってる五人が、今ここにいていうことですよ。

真佐子 それは、少ない数じゃないわね。

河野 ええ。……同窓会の二次会で話をしてるうちに、何となくそういう話題が出て、そう思ってる人が結構いるって分かったんです。

真佐子 それで、さっきあなたが言った、私をそんな風に扱わせるようになったのが、自分たちのせいだって、どういうこと？

松原 言ってしまったえば当たり前のことなんですが、僕たち、あの時、先生が、その、犯人だって思ってしまったんです。……いや、思ってしまったって、断言することもないんですが……。

山下 とにかく、俺たちはあの時、先生を犯人扱いしたんですよ。俺たちも、警察の人とか、大人に色々聞かれました。

斎藤 浄化槽のまわりに誰がいたか、とか、蓋はどうだったか、とか……。

河野 あの日池上君と一緒にいたのは誰か、とか……。

松原 池上を連れ廻っていた大人がいたんじゃないか、その人を見たんじゃないか、とかも聞かれましたね。

早苗 私も聞かれたわね。

真佐子 あなたも？　どんなことを？

早苗 （やや言葉を濁す）まあ、色々よ。……

山下 とくに俺は、池上とわりと仲が良かったから、あいつが死んだことに動揺していたし、大人に言われることに、そのとおり答えていたかもしれない。

真佐子 それは、誘導尋問みたいなこと？

山下 今から思えば、そうだったですね。

真佐子 それで、私が池上君を、浄化槽に突き落として、殺したつていう話を作り上げたつていうこと？

山下 ええ、結果的には……。

松原 結果的につていうか、そういう話を作り上げることに、僕たちが加担していたつていうことですね。

真佐子 （椅子から立ち上がり、やや呆れたように）そんなこと、分かり切ったことじゃない。あなたたち、長い間、そのことに気がつかなかったの？

元生徒たちは真佐子の言葉にしばらく沈黙する。

松原 ……申し訳ないと思ってます。僕たちがそれだけ幼稚だった
っていうことですね。

斎藤 本場にそうです。子供だったんですね。……今でもまあ、子供
だけ。

河野 きっと私が一番ひどいんでしょうね。……あの時、先生が池
上君を連れて浄化槽の近くにいたかもしれないって言ったのは私
だったと思うわ。

渡辺 ええ、本当かよ？ そんなこと、この前の集まりじゃ言わな
かったじゃないか。

河野 ええ、言い出しにくくて、……ごめんなさい。……実は、
ずっと気にかかってたのよ。

山下 真面目な奴なんだなあ、意外と。

河野 真面目とか不真面目とかの話じゃなくて。……あの事件が収
まっただけのことだったと思うわ。自分が何を言っただか気がつい
たのは。それがずっとしこりみたいに残ってたの。……だから、
今日一番ここに來たかったのは、私よ。

山下 そうだったのか。そういえばこの前も一番熱心だったよな。

河野 (真佐子に) 今日先生に会えて本当によかった。あらためて
お詫びしたいです。

真佐子 あやまる必要はないわよ。今あやまったって、何も戻らないもの。……それに、あなたの言ったことは、ごく一部分にすぎないと思うわ。

河野 ごく一部分？

真佐子 私が疑われた状況の一部分っていうこと。そういうことを言ったのはあなただけじゃないわ。私の顔も知らないような人に、犯人扱いされたもの。……私に何の恨みがあつたのかしら。

早苗 そんなもの、なかったのよ。

真佐子 じゃあ、なぜ？ なぜ、私が犯人扱いされたの？ 自分の大事な生徒を、浄化槽に突き落としたりする教師がいる？

早苗 いないわよ、どこにも。いるわけじゃないじゃない。

真佐子 本当にひどかった。思い出したくも、しゃべりたくもないけど、この際だから話すことにするわ。……私も長い間封をしてきたわけだからね、この事件のことに。

早苗 そうよ、話したいことがあれば、話しちやいなさい。この子たちも、そういうことを聞きにやって来たんでしょ？

山下 ええ、そうです。

松原 この事件のこと、僕たちよく知らないままに過ごしてきたんです、当事者だったのに。……最近ですよ、図書館の古い新聞で

調べたりしたのは。

真佐子 飛鳥山事件。

松原 世間ではそう言われてたんですよ。

真佐子 でも今じゃ誰も覚えてないわよ。小学生が一人死んだくらの事件なんて、ちっぽけなものよ。最近じゃいっぺんに十人くらい殺されたりする事件だって時々起きてるからね。

このあたりで早苗は上手のキッチンの方に姿を消す。

松原 そんなことないですよ。大きな事件だったです。罪のない教師がいつの間にか生徒殺しの犯人に仕立てられそうになったわけですから。

渡辺 お前、そんな人ごとみたいに言うなよ。俺たちだって、そこにいたわけじゃないか。

松原 人ごとか。……ほんとにそうかもしれない。あの場にいたのに、当事者だったっていう感覚がないんだからな、今でも。だから、古い新聞の記事を読みながら、ああ、そうだったのかって初めて知ったことが多かったよ。

真佐子 それはさっきあなたたちが言ったとおりよ。つまりまだ子

供だったの。十一や十二の子供に事件が把握できるはずないじゃない。

松原 ……そうですかね、やっぱり。

真佐子 そうよ。何か大変なことが起こったって、そんな感じがあ
るだけよ。あなたさつき、嵐みたいなのに襲われたって言ったで
しょう？

松原 ええ。

真佐子 本当に嵐だったのよ。私にとっても、あなたたちにとつて
も。……ただ、私はそれに吹き飛ばされてしまつて、学校にいれ
なくなつてしまつたけど。

河野 でも、私たちは襲われただけじゃなくて、その嵐を作つてし
まつたんじゃないかしら。

真佐子 だから、そんな風に考えるのがおかしいわよ。

斎藤 さつきユカが、……河野さんが、責任を先生に押しつけるよ
うなことをしたって、言つたけど、それは私もそうかもしれない。
大人に誘導されるままに、放課後浄化槽の近くで山本先生を見た
って、私も言つた覚えがある。

真佐子 そんなこと検証し始めたらしきがないって。……それに今
からそんなことをしたって仕方ないじゃない。

渡辺 仕方ないことはないと思うけど。何か、胸の中にもやややす
るものがあるって、それをすつきりさせたいって気持ち、あるじゃ
ないですか。

真佐子 そう？　じゃあ、私はどうなの？　あなたたちに忘れない
過去をつつかれて、胸の中のもややがすつきりするの？

山下 ええ、それは分かってます。……だから、俺たちは先生をあ
らためて傷つけたくないんです。

松原 そこがジレンマですね。

渡辺 ジレンマって何だ？　難しい言葉使うなよ。

松原 一方を立てればもう一方は立たずっていうことだよ。

渡辺 ああ、そういうことか。だったら大体分かる。……つまり、
俺たちと先生の関係だな。

松原 そういうこと。

斎藤 私たちはそういう気持ちから、先生にあらためてお詫びしよ
うと思っ、ここにお邪魔したんですよ、簡単に言えば。でも、
そうすることが、先生に嫌な思いをさせるだろうなっていうこと
も、分かってました。

真佐子 そう。その推測は当たってたようね。……でも、さっき言
ったけど、みんなが来てくれて、嬉しくなかったかっという、

反対よ。嬉しかったわ。ずっと世間に背を向けて暮らしてきたから。……だからあなたたちにつき合うことにするわ。

山下 そう言ってもらえると、有難いです。

真佐子 私個人としては嫌だけど、過去を振り返るのは、いいことだと思うわ。それがあなたたちの未来につながるのであれば。

斎藤 そうですか。……じゃあ、もう少しつづけていいですか？

真佐子 つづけるって、あの事件の探索を？

斎藤 ええ、私たちが過去を振り返って、少し大人になるために。

真佐子 そんな積極的な意味があるなら、どうぞ。私が覚えてることがあったら、教えてあげるわ。

斎藤 さっき、私たちが嵐を作ったんじゃないかっていったけど、何だかその中にいることを喜んでいたみたいなところがあつたと思うんです。（皆に）そんなことない？

渡辺 そうかなあ。

山下 そうかもしれない。俺は何を言ったか覚えてないけど、確かに何か、興奮するようなことが起こってるっていう感じもあつたかもしれないな。

松原 確かに。こんな言い方をすると不謹慎で、怒られるかもしれないけど、何だかお祭りが起こってるような、そんな感じもした

な。

真佐子 それはなぜ？ なぜそんな感じがしたの？

松原 そうですね。……ほんとに人ごとみたいな言い方をすると、僕たちの毎日って、決まり切ったことの繰り返しじゃないですか。……まあ、今もそうだけど。だからそういう毎日に、突然非日常的な出来事が起きて、子供ながらにすごい興奮を覚えたっていうことじゃあないでしょうか。

渡辺 お前って評論家だなあ。

斎藤 でも、確かにそういうところがあつたわ。

真佐子ほんとにそれだけ？

松原 どういうことですか？

真佐子 池上君ってどういう子だった？

松原 どういう子って……。

山下 大人しい、目立たない奴でした。

渡辺 俺とは案外仲がよかったな。どちらも勉強できなかったし。

斎藤 でも、時々いじめられてたかもしれない。

真佐子 そうでしょう。

山下 それって、つまり……。

真佐子 池上君だったからじゃないの？ あなたたちが興奮したの

は。

斎藤 池上君がいじめられっ子だったから、私たちが調子に乗っちゃったっていうことですか？

真佐子 そう、はっきり言えば、そうじゃないの？

斎藤 じゃあ、あの子が死んだことで、私たちが喜んだっていうことですか？

真佐子 喜んだとは言っていないけど、でもそういう面がないとは言えないんじゃない？

渡辺 それはないよ。池上が死んだ時、俺泣きましたよ。

斎藤 私もそう。泣いたし、すごいショックでした。

山下 そんな風に先生思ってたんですか？

真佐子 いえ、私もあの時そう思ってたっていうより、今あなたたちの話を聞いて、事件を思い出しているうちに、そう思えてきたのよ。

松原 僕がそう思える言い方をしたのかもしれないね。

河野 でも、先生の言うことも当たってると思うわ。私たちが池上君を仲間はずれにしたこと、何度かあったから。（渡辺に）あなただって、池上君と仲が良かったっていうけど、プロレスの技をかけて痛がらせたりしてたじゃない。

渡辺 痛がらせたりなんかしてないよ。遊んでただけだよ。……ただ、俺の方が大分体が大きいから、あいつが痛がったりすることもあったただけだよ。

河野 でも、やめてくれって、池上君が叫んでたのを聞いたことがあるわ。

渡辺 そりゃあ、そういうことも一回や二回はあったかもしれないけどさ。……でも、お前だって、池上の上履きを隠したことあったじゃないか。あいつ、仕方なくはだしで教室に入ってきたよ。

河野 え？ そんなことしたっけ？

斎藤 したわ。覚えてる。私もしたから。

山下 そういえば、俺は上履きじゃないけど、あいつの筆箱を隠して困らせたことがあるよ。

河野 それで、周りの誰も鉛筆を貸してあげなかった。

斎藤 そうね。隣に座っていたのは私だったわ。

真佐子 （やや皮肉に）やっぱり、思い出すことには意味があるみたいね。

斎藤 （松原に）あなたくらいよね。そういうつまらないことをしなかったのは。

松原 いや。……僕も池上に意地悪をしたことあるよ。算数の宿題

を教えてくれって頼まれて、わざと間違った答えを教えた。

真佐子 黒板に出てきた池上君が、珍しく自信ありげに答えを書いたのに、間違ってたわね。

松原 それをやらせたのは僕です。

皆しばらく黙り込む。

斎藤 ……やっぱ、私たち、池上君をいじめてたのよ。自分たちでは、ちよつとからかっていたくらいにしか思ってたけど。

真佐子 そうかもしれないわね。……でも、私だって、池上君を軽く見てたことは事実だわ。

山下 そうなんですか？

真佐子 ええ、そうだわ。授業中あの子に当てて答えられなくても、答えるのを待たなかったもの。

河野 ああ、そんな感じでしたね。

渡辺 でも、それがあの事件に何の関係があるんだよ。

松原 やっぱあるよ。

渡辺 どんな風に？

松原 僕ら、あいつがクラスの誰かにもてあそばれて、浄化槽に落

とされたって可能性を考えたんだ。

渡辺 ええ？ そんなこと考えてねえよ。

河野 私も、そこまでは考えてないと思うけど。

山下 ……いや、考えたよ。池上が浄化槽で死んでるって聞いた時、俺はやばいことが起こったって思った。

斎藤 やばいこと？

松原 池上が自殺したってこと？

山下 それもある。

斎藤 浄化槽で自殺する人間なんかないわ。

山下 でも現にそこで死んでいたわけだから。

松原 そうだね、それはあるよ。そう言えば、僕もそれは直感したよ。もしそうだったらずいという気はした。口には出さなかったけど。

河野 それは私もそう思った気がする。

真佐子 いじめによる自殺は珍しくないからね。

松原 可能性としては、他殺の方が大きいでしょうけどね。そうだと
しても、僕たちに帰ってくることになる。

渡辺 俺たちの誰かがあいつをやったってか？

松原 可能性としてはね。

斎藤 ここにいる人よりも、池上君をいじめてる子はいたわ。誰とは言わないけど。

渡辺 そいつがやったっていうことか？ その、誰っていうのは分からないけど。

松原 実際にはそうじゃないと思うけど、あいつを死なせたことの責任からとつさに逃れようとしたんだよ、誰もがみな。

再び、皆しばらく黙り込む。

河野 ……そうかもしれない。

斎藤 それで、山本先生が標的に。…

真佐子 何か、出来事の道筋が見えてきたみたいね。私もあの時そんな風に考えたわけじゃなかったけど、今話していると、そうだったかな、って思えてくるわ。

山下 それって、変な言い方だけど、俺たちが先生をいじめの対象にしてしまった、っていうことか？

松原 そう言えばそういうことだよ。

真佐子 私は否定も肯定もしないけど。…でもあなたたちあの頃子供だったって言ったけど、そうじゃない部分もあるのよ。

山下 それはどういう？

真佐子 小学六年生は六年生なりに、自分の身を安全なところに置こうとするのよ。

山下 子供なりにエゴイストっていうことですか。

真佐子 みんな自分がかわいいのよ。大人だけじゃなくて、子供だってね。

山下 そうかもしれないね、確かに。……

皆は言葉につまったように沈黙する。

3

そこに早苗が果物を切ったものを盆に載せて登場し、盆を中央のテーブルに置く。

早苗 みんな何深刻そうな顔をしてるの？せっかく集まったんだから、もつと楽しそうにしてらどう？ 果物でもつまんでちょうだい。

皆「有難うございます」「すみません」などと言いながら、テ―

ブルの果物を取る。

早苗 （真佐子に）あなたも取ってよ。

真佐子 有難う、いたたくわ。と言っても、私が買ってきたものだけどね。

早苗 どういう話の展開になったの？ 暗い雰囲気になるんじゃない、来たかいがないじゃない。それに、過去をいくら振り返っても、何も出てこないわよ。

山下 それはそうですけどね。

早苗 みんな若いんだから、未来を向いていきましょう。私なんか忘れっぽいから、昔のことなんか、思い出せないわ。

斎藤 でも、あの事件のこと、よく覚えておられるじゃないですか。

早苗 まあ、あれだけ騒がれたらね。新聞にも何日も載ったし。

松原 でも今日ここにきてよかったです。昔のことを振り返るのは、意味があります。

早苗 どういう？

松原 自分が子供の頃どれだけのことを考えていなかったかということがよく分かりますよ。それが自分を多少大人にしてくれるんじゃないかなって思います。

早苗　へえ、真面目なこと言うのね。今どきの人にしては。

山下　何しろ文学部だから。……でも、そういうことですよ。大人になるにつれて、昔あったことが逆に気になってくるっていうこと、あるじゃないですか。

早苗　そう？　私はその反対のタイプだから。昔気になってたことでも、どんどん忘れて気にならなくなっちゃう方ね。……大事なのは、これからどう生きていくかってことじゃない？　とくにあなたたち若いんだし。

松原　そうだけど、そのために昔のことに決着をつけたっていうか、はつきりさせたいっていう気持ちがあるんですよ。

早苗　まあ、そういう考え方もあるかもね。

真佐子　それで、まだ決着はつかないのね。

松原　ええ、分かった部分もあるけど、かえって分からなくなった部分もありますね。

斎藤　ええ、……ひとつ分からないことが　あります。

真佐子　それは何？

斎藤　すごく基本的なことなんです、あの時、なぜ容疑者として山本先生が浮かび上がってきたんでしょうね。先生はもちろん、あの浄化槽の近くにおられなかったんですよ。

真佐子　　そうよ。

河野　だから、それは私が言ったことなにかが影響してたのよ。子供
の言ったことが証言扱いされて。

斎藤　でも、なぜユカはそんなこと言ったの？　警察の人にそう言
えって言われたの？

河野　そんなことない。ある程度誘導されたことは事実だけど。

斎藤　じゃあ、どうして？　どうしてそんなこと思いついたの？

河野　それは。……（言葉につまる）よく分からない。なぜそんな
こと言っただろう。……でもそれは、私が思いついたことじゃ
ないわ。私も誰かにそういうことを耳に入れられたのよ。

斎藤　誰に？

河野　誰だっただろう。……

その時、玄関のチャイムが鳴る。

山下　あ、岡本じゃないかな。

斎藤　私見てくる。

斎藤は下手に退場していく。斎藤が下手からすぐ戻ってくる。

斎藤 やっぱりそうだった。

他の元生徒たちと同じ年格好の女（女３・岡本）が登場する。

岡本 ごめんなさい、遅れてしまって。バイトがなかなか抜けられなくて。（真佐子を見出して）山本先生、お久しぶりです。お元気ですか？

真佐子 ええ、なんとかね。みんなと色々昔のことを話してたところよ。

岡本 そうですか。私ももっと早く来るつもりだったんですが。（他の元生徒たちに）みんな、久しぶり。全然変わってないなあ。

河野 ミサトもね。

山下 ほんと、遅刻が多いのも変わってないよ。

岡本 ごめんごめん。わざとじゃないから。

真佐子 （岡本に）あなたはこの人たちにこれまで会ってないの？
岡本 ええ、この前の同窓会にも出られなくて。でもこの会のことを山下君に聞いて、行ってみようって思ったんです。

真佐子 そう。来てくれて嬉しいわ。あなたもジュースとかいかが？

岡本 有難うございます。ちょうど喉が渴いてたから。
渡辺 駆けつけ三杯。

岡本 そんな飲んだら、お腹壊すわよ。（そう言つて真佐子に渡されたジュースをぐっと飲む）

真佐子 （岡本に）今は大学生？

岡本 ええ、一応。つまらないとこですけど。……でも、クラブやバイトで結構楽しくやってます。

真佐子 何を勉強してるの？

岡本 勉強してるかどうか分からないけど。生活科学部って、昔の家政科を、名前だけ変えたようなところにいるんです。

真佐子 そう、結構地道なところにいるんだ。

岡本 まあ、地道っていうより地味、ですかね。私には合つてると思います。（山下に）クラブはチアリーディングで頑張ってます。

真佐子 へえ、華やかそうなところね。

岡本 いえ、完全体育会系ですよ。（山下に）……ところで、もう色々話が出たんでしょう？

山下 色々ね。予想どおりの部分もあったし、そうでない部分もあったよ。

岡本 私は何も予想なんかしてないけど。

山下 俺たちがここに来たのは、一種の負い目みたいなものからだ。ったわけだろう。先生はもちろん負い目っていうのを嫌がるけど。で、色々振り返っているうちに、やっぱり俺たちが先生を追いつめた面があるっていうことが見えてきたんだよ。

岡本 私自身は別に負い目ってないけどね。でも腑に落ちないこととかはあったわ。

斎藤 何、それは？

岡本 それは、やっぱりまずどうして先生があんなことになったんだろうっていうのが一番にあるし、それから本当は誰が池上君を殺したんだろう、っていうことがあるわ。

松原 なかなかストレートな言い方だね。

岡本 ああ、私持って回った言い方ができない人だから。

山下 昔はそうでもなかったのにな。

岡本 そうね、そういうところで揉まれてきたからかな。何しろ体育会系だから。

真佐子 一つ目の問題については、今でも私の方で聞きたいくらいよ。二つ目の問題は、結局分からなかったの。私の容疑が晴れてから、警察は遅ればせに捜査をまた始めたけど、見つかるわけないわよね、そんなに時期を失したんじゃない。

松原 きつとどこかの変質者が学校に入り込んでたんじゃないかな。……もちろんそうだったら怖いことだけど。

山下 俺たちが標的になった可能性もあるわけだからな。

早苗 近くでさらわれそうになった子がいるとか、聞いたことがあったわね。変な事件が時々起こってたのよ。

真佐子 あの頃はまだ学校のガードが甘かったのよ。外から簡単に人が入れるようになってたから。今じゃ考えられないけど。

松原 だったら、そういう怪しい奴がすぐに捜査線上に上がってもよかったのにな。

斎藤 その前に、先生の名前が上がって来ちゃったのよね。

渡辺 だから、警察がひどいんだよ。勝手にそういう見込みをもつてしまったんだよ。

松原 でも、すべて警察のせいにするんだったら、僕たちがここに来た意味がないじゃない。警察も情報があって動くんだし、その情報の一端を僕たちが担ってたんだよ。

河野 そういうことよ、そこに私なんかもからんでたわけだし。

山下 そんな自虐的にならなくていいよ。君の言ったことだって、誰かに影響されてたわけだろう。さっきそう言ったじゃない。

河野 ええ、誰かに耳に入れられたんだと思うわ。……でも、きつ

とその人だって、情報源というわけじゃないんだろうけど。

松原 そうだよ、きつと。噂が噂を呼んで、ネットワークみたいなものを作っちゃうんだよ。

岡本 (河野に) 何？ さっきあなたが言ったことって。

河野 あの時、放課後山本先生が池上君と一緒にいたところを見たことがあるって、言っちゃったのよ。見てないのに。

岡本 そう？ 見てなかったの？

渡辺 だから、警察に誘導されてそう言ったんだよ。

河野 ええ、……でも、その前に私はそういう話を聞いてたのよ。誰かから。

岡本 誰って？

河野 思い出せないんだけど。

岡本 私も聞いたわ、それは。

河野 本当？

岡本 ええ、ユカにそれを言ったのは、たぶん私よ。

河野 (驚いて) そうだったの？

岡本 あなた一人に直接言ったんじゃないと思うけど。でも、私がそんなことを言ってる場にあなたもいたのよ。

河野 そうだったかしら、よく覚えてないけど。

山下 （岡本に）それは、君がその場面を自分で見たということかい？

岡本 いえ、そうじゃないわ。

斎藤 じゃあ、ミサトはなぜそんなこと言ったの？

岡本 私も人から聞いたのよ。

山下 やっぱり噂か。その噂の出所は分からないよな、もちろん……。

岡本 分からない、とは言い切れない。

松原 じゃ、誰がそういう話を流したか、思い当たるっていうこと？

岡本 （早苗に眼をやりつつ）ええ、まあね。

河野 どこなの、それは？

岡本 （早苗を指し）この人よ、たぶん。

皆は驚いて早苗を見る。早苗はとくに表情を変えない。

早苗 （落ち着いた口振りで）そうね、そうだったかもしれない。

私も一役買ってたかもしれないわ。

真佐子 （驚く）なんですって？

岡本 私は、誰かが言ってた言葉が頭にあって、ユカに話したのよ。

誰が言ってたか、覚えてなかったけど、ここに来てこの人を見たら、思い出したわ。

真佐子 （早苗に）それは、私が殺したかもしれないっていう話を、あなたがしたっていうこと？

早苗 そうかもしれない。もちろんあなたが殺したなんて言い方はしてないけど。

真佐子 でもそんなこと、あなた今まで言わなかったじゃない。

早苗 そうね、私もこの子たちと同じなのよ。今まで自分があの時何をしたのか、よく考えなかった。皆の話を聞いていて、私のうかつな頭でも思い出せることがあったのよ。

真佐子 一役買っているって言ったけど、この子たちと同じくらいなの、それともそれ以上？

早苗 さあ、どうかしら。……どうやって比べるのか分からないけど、同じくらいかしら。……騒動のなかで私が廊下を歩いていたら、池上君が誰かといたところを見なかったかって、聞かれたのよ。

真佐子 誰に？

早苗 覚えてないわ。でも警察じゃなかった。学校の人間よ。

真佐子 それで、私と一緒にいたって言ったの？

早苗 ええ。……だって、あなたはあの子がいじめられてるから、よく一緒にいたじゃない。

真佐子 そういうこともあったわ。あの子を守る意味でね。……でも、そんなに度々じゃないわ。

早苗 そういう光景が記憶にあったから、そう言ってしまったのよ。

真佐子 現場も見ないで。

早苗 ……ええ。

真佐子 それが岡本さんとかの耳に入ってたっていうこと？

早苗は答えない。元生徒たちはその場の雰囲気が変わってきたことにとまどう。

山下 それは何とも言えないと思います。三浦さんもそう言われたかもしれないけど、それはきつと悪意からじゃないと思いますよ。真佐子 悪意とか、責任とか、そんなこと言ってないわよ。

松原 でも、やっぱり話はそういうことになりますから。……三浦さん個人の問題じゃないと思います。

山下 そういうことだね。……どうだろう。すっかり長居をしちゃったから、この辺で失礼した方がいいんじゃないか？

松原 そうだね。そろそろ失礼しよう。岡本さんには、来たばっかりで悪いけど。

岡本 そんなことないよ。ここにいつまでも大勢でいるのも何だから。

斎藤 そうね。……（真佐子と早苗に）本当に長い間つき合わせてしまつて、申し訳ありませんでした。私たちこの辺で失礼します。

真佐子 え、いいの？ もっといてもらってもいいのに。

山下 いえ、今日ここにお邪魔した目的は、大体果たしましたから。渡辺 先生、今度はお酒の席で一緒にしましょう。

真佐子 そう？ じゃ、また誘ってくれる？

山下 もちろんですよ。今日は本当に有難うございました。

河野 私も少し気が晴れました。有難うございました。

渡辺 それから、ご馳走様でした。

元生徒たちは皆立ち上がり、帰る準備をする。

山下 それじゃあ、これからもお元気で。

真佐子 （立ち上がって）みんなもね。またいつでも遊びに来てちょうだい。

それに対して、皆「分かりました」「失礼します」などと言い、下手から退場する。真佐子と早苗もそれにもなつてやや下手に動き、元生徒たちを送る。

4

元生徒たちを送り出した真佐子と早苗は、元の場所に戻ってくる。

早苗 （空になった椅子に腰掛け）あの子たちの言い方じゃないけど、嵐がやつて来て、去っていったよね。

真佐子 そうね。……でも、さっきの話はまだ終わってないわ。

早苗 ああ、私があの時話したっていうこと？

真佐子 （ソファーに腰をかけ）そう。もう少し聞きたい。ついでだから。

早苗 聞いても仕方ないんじゃないの、今さら。

真佐子 そんなことないわ。過去を振り返ることに意味があるって、誰か言ってたけど、確かにそうだわ。

早苗 それで、何を話せばいいの？

真佐子 あの時、あなたまでなぜ生徒と一緒にのことをしたのかっていうことね。あの時だって、私たち知らない同士じゃなかったじゃない。……というより、結構仲がよかったはずよ。

早苗 ええ、あなたは教員のなかでは、私が一番話しやすい人だった。女の事務職員を、手伝いくらいにしか思っていない人もいたなかではね。

真佐子 でしょう。だったらなぜ？

早苗 なぜって、何がなぜ？

真佐子 私があの時、池上君と一緒にいたって言ったこと。

早苗 分らない。なぜだろう。

真佐子 本当に、分らないの？

早苗 ええ。……いえ、本当はそんなこと ない。分らないっていうのは嘘よ。

真佐子 じゃあ、なぜ？

早苗 そうね。……やっぱり、あなたを陥れたっていう気持ちがある。どっかにあったのかもしれない。

真佐子 どうして？ どうしてそんな気持ち ちがあったの？ 私たち友達だったじゃない。

早苗 そうね、……きつと、あなたが妬ましかったからよ。……今

思えば。

真佐子 妬ましかった？ 何が？ 私に妬ましがられるようなものなんて何かある？ まあ、一応教員と事務職員という立場の違いはあったけど。

早苗 いえ、別に私が事務職員だから、教員のあなたがうらやましかったっていうわけじゃないわ。

真佐子 そりゃあ、そうでしょう。小学校の教員なんて、苦勞ばかり多くて、生徒たちは一生懸命育てたって、前を素通りして中学に行ってしまうし。

早苗 それに、私に事務の仕事はあってるしね。……そうじゃなくて、学校の外のことよ。

真佐子 ……まさか、ご主人のこととか？

早苗 ……そうね、それに関係あるわ。

真佐子 ご主人が急に亡くなって、あなたが一人になって。……

早苗 淋しかったのよ。

真佐子 だからあの頃、私はあなたと時々食事をしたりしたわ。

早苗 そうね、時々誘ってくれた。それは嬉しかったわ。……でもあの頃、あなたは淋しくなかったわよね。

真佐子 （何かを察したように）それって、あの人のことを言って

るの？

早苗 ……そうね、そうかもしれない。

真佐子 （驚いたように）そんなこと。私自身、忘れかけてたのに。

早苗 忘れはしないでしよう。記憶力のいいあなたが。

真佐子 記憶力は関係ないわよ。……それで妬ましかったっていうのは、そのことなの？

早苗 ええ、きつとそうだわ。……私はうらやましかった。食事をする時も、……佐山さんだっただけ、あの人が一緒に時があつたよね。

真佐子 ……ええ。よく名前を覚えてるわね。

早苗 なぜかね。物覚えの悪い私が。

真佐子 まさか、あなたあの人が好きだったとか？

早苗 それはないわよ。……でも、あなたの隣に、自分の好きな人がいるのがうらやましかった。

真佐子 それは、私からあの人を、引き離したかったっていうこと？

早苗 そんなことないわ。……いや、あつたかもしれない。

真佐子 それで、あの時、あんなことを。……

早苗 別にそう思ってたわけじゃないわ。今思えば、そういう気持ちもあつたかなあつていうことよ。

真佐子 でも、そのために、私は恋人を失い、職を失い、何もかもなくしたわ。

早苗 そうね、結果としては。……でも、さっきの話じゃないけど、私があ的事件を左右したわけじゃないし、私の言ったことなんか、ほんのちつぽけな要素にすぎないわ。

真佐子 でも宙に消えた言葉じゃないわ。子供たちを伝わって、警察のところにまで行ったのよ。

早苗 そんな風になるとは思わなかった。本当に申し訳ないことをしたわ。

真佐子 じゃあ、なぜそんなことを口にしたの？

早苗 なぜだろう。……あなたを不幸にしたかったわけじゃないのに。

真佐子 したかったのよ。さっき、私が妬ましかったって言ったじゃない。

早苗 言ったわ、確かに。……そうね、やっぱりそう思ったのかもしれない。

真佐子 どうして？ どうしてそんな風に思ったの？

早苗 ……あなたへの仕返しだったのかもしれない。

真佐子 （驚いて）なぜ仕返しされないといけないの？ 何か、私

が仕返しされないようなことをした？

早苗 あなただって、恋人と一緒に、夫を亡くした女と食事をすれば、その女が面白くないことは分かるでしょう？

真佐子 でも、あの人を紹介してって言ったのはあなたじゃない。私はあの人と正式に婚約したわけじゃなかったけど、その直前だった。だから連れてきたのよ。

早苗 ……本当に幸せそうだった。……うらやましかった。

真佐子 そんな風に思うなら、初めから言わなきゃよかったのに。

早苗 そりゃあ、言うわよ。あなたとは友達だったし、そういう人がいるんなら、一度一緒に食事でもしましょうかって。

真佐子 だったら、私が悪いわけじゃないわよ。

早苗 そうかしら？

真佐子 え？ どういうこと？

早苗 そんな風に言わせたのはあなたよ。

真佐子 私が言わせた？

早苗 ええ。それまでも時々あなたと一緒に食事をしてたけど、あの頃あなたは見るからにうきうきしてた。何かいいことあるのって、言わせたそうにしてたわよ。実際そんなことをほのめかしてたじゃない。

真佐子 そうだったかしら。

早苗 バスが一緒だったから、帰りに四方山話をよくしたじゃない。その時そんな風にあなた私に言ったわ。

真佐子 それは覚えてないわ。帰りのバスなんて、疲れてるから、時間つぶしに色々口走ったのかもしれないわね。

早苗 それに、たまに二人でお酒を飲むことがあったじゃない。その時にも聞いたわ。

真佐子 ああ、お酒の場だったら言ったかもしれない。

早苗 そういう時に本音が出るのよ。

真佐子 本音？ 何、本音って？

早苗 あなたにもあったのよ、見返したい気持ち。

真佐子 見返したい気持ち？

早苗 こう言ったら何だけど、あなた結構長い間、彼氏とか恋人とか、いなかったじゃない。

真佐子 そりゃあ、学校の教師の仕事って、結構忙しいからね。そんな暇がなかったかもしれない。

早苗 だから私に見てもらいたかったのね。

真佐子 （無言）……。

早苗 私も仕事ばっかりの堅い女じゃないのよ、って思ってもらい

たかったのね。それは分かるわ。

真佐子 （不意に激したように）そうよ、だったら何だって言うの？ 私は子供の頃からくそ真面目な奴って言われてきたわ。大した秀才でもないのにね。付き合いも下手だったから、彼氏なんかいたことなかった。だから、つき合う人が初めてできたのが嬉しかったのよ。しかもその人だって、友達に紹介してもらった人だった。……でも、そのどこがいけないの？ あなただって、ご主人と仲良さそうにしてるところを、私に見せたことがあったじゃない、何度も。

真佐子 そうね、そういうこともあったわ。だから、当然よ、あなたが私に対してそんな風にしようと思うのは。……ただ、私には苦しかったの。あなたが彼氏と一緒にの所を見るのは。

真佐子 だから、だったら、初めからそういう状況を作らないようにすればよかっただけじゃない。

早苗 きっとそうね。私がバカだったんだわ。……でも、あなたを喜ばせてあげたかった。

真佐子 喜ばせてもらう必要なんかなかった。私は一人で喜んでいたんだから。

早苗 それで十分だった？

真佐子 十分だったわよ。

早苗 本当に？ でも、じゃあ一緒に食事をしましょうかって言ったら、あなた本当に喜んで私に礼を言ったわ。

真佐子 そりゃあ、礼くらい言うでしようよ。

早苗 そのおかげで、私の前で一杯見せつけてくれたわ。幸せそうなどころを。私は夫を亡くして半年後だったのに。

真佐子 (やや思い直して) それは悪かったかもしれないわね。：私が舞い上がっていて、あなたの状況を忘れていたところがあったかもしれない。

早苗 楽しそうで、幸せそうだった。：私は夫を亡くした上になたまであの人に取りられて、本当に独りつきりになるような気がしたわ

真佐子 (無言) ……。

早苗 私は、あなたを失くしたくなかった。生徒たちと同じレベルだと言われるけど、あなたを私のために取っておきたかった。

真佐子 私はあなたの慰め物じゃないわ。昔も、今も。そのために、私の未来を奪ってしまったの？

早苗 そんなつもりはなかったわ。：結果として、そうなったのかもしいけど。

真佐子 それじゃあ、ただのエゴイストじゃない。子供みたいな。

早苗 あなたはエゴイストじゃないの？

真佐子 そうじゃないとは言わないわ。私だって、わがままで、自分勝手だわ。……でもそれで人を傷つけたりするようなことまではしない。

早苗 したわよ。あなたさっき自分でそう言ったじゃない。

真佐子 ……言ったわ、確かに。

早苗 互いのエゴを比べていてもきりがないんじゃないの？

真佐子 ……まあ、私にとってのあなたも、同じようなものだったかもしれない。

早苗 同じようかって？

真佐子 あなたも、私の慰め物だったわ。

早苗 そうでしょう？

真佐子 確かに、あなたじゃない人を、相手にしないもの。あなただから、彼氏を見せる相手に選んだんだわ。

早苗 それは分かってた。……でも、それが私の役目だと思ってたから、つき合わないといけないと思ったの。

真佐子 （気がついたように）……じゃあ、何？ あの事件は、結局私自身に帰ってくるっていうこと？

早苗 ……どういうこと？

真佐子 私があなたを誘わなかったら、私があの人とあなたの前で仲良くしなかったら、あの事件が起こった時、生徒を誘導するよ
うなことをしゃべらなかった、っていうことなの？

早苗 そんなはつきり関係づけられないわよ。でもそんな風に辿れるかもしれない。

真佐子 何てことなの、考えてもみなかった。……バカげてるわ。そんなことで、私の一生が台無しになってしまったの？

早苗 ……そう思うんなら、私を打つなり、蹴るなりしてもいいわ。

真佐子 そうしてもいいの？

早苗 どうぞ、あなたの一生を台無しにした女に、気がすむまで復讐するといいわ。

早苗はそういつて、真佐子の前に座る。

真佐子 （一瞬感情に駆られて立ち上がるが、考え直して）……そんなことしないわよ。

早苗 してもいいわよ、あなたの気がすむことを、何でも。

真佐子 いえ、何もしない。しても仕方がないわ。（椅子にあらた

めて座り直す）……今話したのは、きっと一つの物語よ。現実がそんなつじつまが合うように動いたわけないわ。私たちが、過去から一つのお話を作って納得してるだけよ。

早苗 （立ち上がりつつ）そう思うの？

真佐子 ええ。現実はずっと入り組んでいて、物語のようにすっきり片づかないわ。あなたのしゃべったことがなくても、きっと私は捉えられて、犯人扱いされたでしょう。

早苗 そうかしら。

真佐子 そうよ、それが私の運命だったのよ。

早苗 私とこうして一緒に暮らしているのも。

真佐子 そう、そういうこと。あの子たちにはああ言ったけど、大事なものは、過去じゃなくて、今持つてるものだけわ。

早苗 私はいつもそう思ってる。

真佐子 過去を振り返るのは、きっと若い人の方が大事なのよ。若くない私たちこそ、未来が必要なのよ。……といっても、大した未来はもう描けないけど。

早苗 そうね、残念ながら。でも、少なくとも私はあなたを持って
る。

真佐子 私はあなたの持ち物じゃないわ。

早苗 ごめんなさい、こんな言い方しかできなくて。でも、私は本当にそう思ってるから。

真佐子 私も同じよ、本当は。私が持つてる一番大事なものは、あなたよ。現実にあなたがいたから、この八年間暮らしてこれたんだもの。

早苗 あの事件がなければ、もっといい人と暮らせたわ。

真佐子 もっといい人？ ……あの人のこと？

早苗 そう。

真佐子 そうかもしれない。…でもあの人と結婚していても、結局破綻して不幸になつてたかもしれない。

早苗 どうして？

真佐子 今思うと何かそういう気がする。実はつきあつてる時も、結構喧嘩してたのよ。

早苗 そう思おうとしてるんでしょ？

真佐子 自分を説得するために？

早苗 そう。

真佐子 そんなこと言つてたら、すべてがそういうことになるわ。

この世に生まれ てきたことからね。

早苗 私と暮らしてきたことも、納得できるってことか。

真佐子 それは今思うとっていうことじゃないわ。事実そうだから。
早苗 だったら、私に感謝してもらってもいいくらいね。もちろん

冗談だけど。

真佐子 感謝まではできないけどね。

早苗 でも、私としては嬉しかったわ。あなたと八年間一緒にいら
れて。もともと私は結婚する前からあなたが好きだったから。

真佐子 私もあなたと暮らすのは、居心地が良かったわ。

早苗 私にとってはそれ以上だった。

真佐子 それ以上？

早苗 そう、あなたが思う以上にね。

真佐子 それって、……まさか、あなた。

早苗 私は子供の頃から、男の人よりも、女の人の方が好きだった
のよ。

真佐子 でも、あなたちゃんと結婚して家庭を持ったじゃない。

早苗 そういう人で結婚している人って、いくらでもいるわ。男の
人でもね。それに、私はただの見合い結婚よ。

真佐子 ……でも、あなた、私にそんな素振り見せたことないじゃ
ない。

早苗 あなたはそうじゃないってことは分かっているから。だからあ

なたに迫ったり しなかった。

真佐子 でも、あなたがそうじゃないかということはどうすうす感じ
てたわ。

早苗 そうなの？ まあ、そうでしょうね。だから、ああいうこと
になったのは、あなたには不幸だったけど、私には悪くなかった
のよ。

真佐子 ……ということは、あの状況は、やっぱりあなたが自分で
仕向けたものだっただけということじゃない。

早苗 私にはそんな力はないわ。結果としてそうだったというだけ
よ。

真佐子 でも、こうなることを望んでたんでしょう？

早苗 どうだろう。

真佐子 きつとそうよ。

早苗 あの池上って子、ほんとにいじめられてたわよね。今日来た
子たちはまだましだったわ。来てない子たちの方がひどかった。

真佐子 それが、何なの？

早苗 私も時々あの子に意地悪してたのよ。あの子が運動場の隅に
カバンを置いて一人で遊んでる時、そのカバンを隠したことがあ
ったわ。

真佐子 どうしてそんな大人げないことしたの？

早苗 だから、私も夫を亡くして落ち込んだのよ。そんなつまらないことをして気を晴らしてたのね。

真佐子信じられない。いい大人がそんなことするなんて。

早苗ほんと、ひどいことしたわね。

真佐子 ひどいことって、……ひょっとして、あなたが池上君を浄化槽に突き落としたんじゃないの？

早苗 そんなことしないわよ。

真佐子ほんとに？ やろうと思えばできたんじゃないの？ あ

なたは学校の中の人間だから、そんなに疑われないし。

早苗それに、あまり目立たないしね。……たしかに、やろうとすればできたかもしれないわね。

真佐子（やや怯えたように）……知らなかった、あなたが、そんな人だったなんて。

早苗 そんな人って？

真佐子 弱い人間を殺せるような人。

早苗 あなたが思ってた私ってどんな人なのかしら？

真佐子 普通の、実直な人間よ。

早苗 そういう人間でもあるけどね。

真佐子 そうじゃない面もあるって？

早苗 八年間も一緒に暮らしてたら、分かるんじゃないの？

真佐子 分からないわ。……それに、あなたのご主人のことにしても、疑わしいところがあるわ。

早苗 疑わしいところ？

真佐子 亡くなったのが早すぎると思ってたけど。あれも、あなたが関わってたんじゃないの？

早苗 私が主人を殺したっていうこと？

真佐子 ご主人が亡くなって、あなたは財産とこの家を手に入れたわ。

早苗 それにあなたをね。……でも残念ながら、主人は病院で闘病してたわ。……もちろん、看病にはしょっちゅう行ってたけどね。

真佐子 看病って、……

早苗 そこでどんな細工でもできるって？（笑う）勘ぐりすぎよ。

真佐子 ……とにかく、これ以上あなたとは暮らせないわ。これまでの恩義には感謝するけど。

早苗 勝手に出ていくの？

真佐子 勝手に？ あなたは私の主人じゃないわ。

早苗 主人よ。これまで八年間、居候させてあげたじゃない。

真佐子　じゃあ、これまでの住居費を払うわ。いくら？

早苗　そうね。一切合計で一千万円でいいわ。

真佐子　そんな大金あるわけじゃないじゃない。

早苗　じゃあ、このままここに居続けることね。大丈夫、これまでと同じように暮らし続けられいいから。

真佐子　そんな風にはできないわ、もう。

早苗　だったらどうするの？

真佐子　（言葉につまる）……。

早苗　でしよう？　あなたが今勤めてるところだって、私のつてじやない。いつだってあなたをやめさせることもできるのよ。

真佐子　……。

早苗　（勝ち誇ったように笑う）そうでしょう。だから、あなたは私のもののなのよ。……まあ、いいじゃない。これまでどおり暮らしてくれたらいいのよ。とりあえず乾杯しましょう。

早苗はテーブルに残っているビールを二つのコップにつぎ、一つを真佐子に持たせる。

真佐子　何によ。

早苗 私たちの新しい関係に。あなたが私という人間をちゃんと知ってくれた記念に。乾杯。

早苗はそう言って一人ビールを飲む。真佐子はコップを持ったまま飲まない。

早苗（真佐子を見つめて）食べ物もたくさん残ってるし、あ、そうそう、冷蔵庫にも色々あるわ。あの子たちにもつたいないからって、出してなかったものも結構あるの。持ってくるからね。

早苗は上手に退場しかかる。

早苗（退場の間に）大丈夫、あなたを殺したりなんかしないから。

退場した早苗の笑い声が響く。真佐子はそれに反応を示さず、立ちすくんだまま。

——幕

本作は一九七〇年代に兵庫県であった「甲山事件」をヒントとしていますが、劇の内容や人物の間には何ら直接的な照応関係はないことをお断りします。